

今回わかった 電力会社のウソ 国のウソ

◆5重の防御のウソ

いままで電力会社も国も「原発は5重の壁に守られており、放射能が外には出ない」と説明してきました。

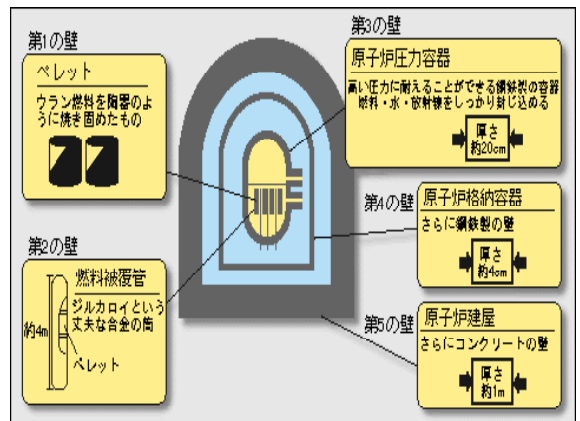
ところが運転中ではありませんでしたが、実際には原子炉圧力容器、原子炉格納容器のふたが開いたままで臨界がおき、中性子が飛び散っていたことを隠ぺい、ウソをついていました。

*1978年11月 東京電力福島第一原発3号機
(蓋はしていた)

*1984年10月 東京電力福島第一原発2号機

*1999年6月 北陸電力志賀原発1号機

そして1999年9月30日のJCO臨界事故は、原発で臨界事故を公表していれば起きなかった可能性は否定できず、隠ぺいは犯罪的です。



放射性物質を閉じ込める何重もの壁

資源エネルギー庁HP e-原子力「原子力ハンドブック」より

◆制御棒の安全審査のウソ!

いままで電力会社も国も「制御棒は抜け落ちることはない」と説明してきました。

ところが 実際には 最高34本も一度に抜け落ちていたことがわかりました(福島第一原発4号機。この時は幸い抜ける程度が少なく、臨界せず)。

そして国の安全審査は運転中に1本抜けた場合しかやっていないのです。ですから処分場の安全審査も想像がつきます。(制御棒は原発のブレーキです。)

◆「もう隠していることはありません」というウソ

2002年東京電力によるひび割れなどの損傷隠し、データを改竄が明るみに出ました。「信頼を損ねたことをおわび」する記者会見をして、社内で徹底調査をし、報告書をまとめ「もうこれ以上隠していることはありません」といっていました。社長も会長も辞任しました。

ところが28年間も大変な臨界事故(制御棒5本が抜け落ちて、7時間半臨界になっていた)を隠していたことが、メーカーからの情報提供でわかったのです。3月30日には12電力会社から隠ぺい・改竄306事案が報告され、この内原発は97事案。でも、これ以上隠していないとは電力会社も国も言うことができません。

原発は放射能と ウソにまみれて 動いています

◆「国が監視しているから安全」というウソ

いままで国は「国の係官が常駐して、常に監視している」といつてきました。

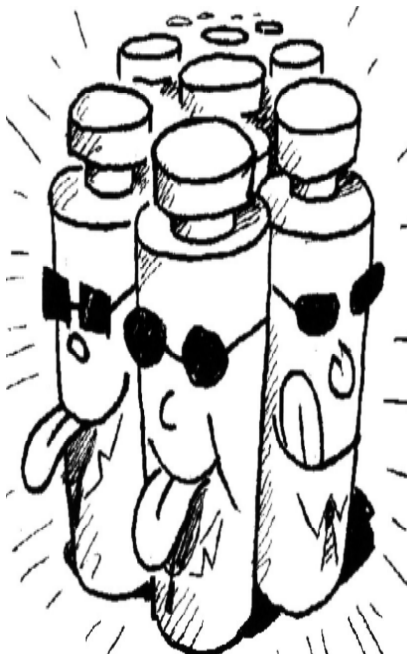
しかし、志賀原発では、国の係官は事故時には現場におらず、事故を知ることはできませんでした。事故直後の引き継ぎ日誌では、何も変わったことはないものとして次長、課長、当直長の印鑑が押し事故を組織ぐるみで隠ぺい。

それを国は見抜けないということがわかりました。

◆「本社の役員は知らなかった」というウソ

こういことが明るみにでると、いままで電力会社の役員は「あくまで現場の判断」と所長に責任を押しつけ、自分たちは知らなかったといいはりました。

しかし、今回志賀原発の臨界事故を隠ぺいすることを決めた会議に現役員が出席していたことがわかりました。経営責任を持った役員が隠ぺいを知っていたことがはっきりわかりました。



こんな電力会社と1995年の高速増殖炉もんじゅ事故で有名になった「ウソつき動燃※（現在の原子力機構）」がNUMOをつくりました。そして隠ぺいや偽装、ウソを見抜けない国が（本当に知っていなかったのか大変疑問ですが）監視・監督します。

百万年間の高レベル処分場の安全を信じることができのでしょうか。



※動燃は「もんじゅ」ビデオ隠し、東海再処理工場火災爆発対応その他のウソが続々と発覚し、1998年10月核燃機構に改組され、2005年10月原研と統合し原子力機構になりました。